

## 第 60 号

## ● 目次 ●

巻頭言「東北アジア地域概念と日本人の世界観」	1
みやぎ県民大学開講「東北アジアの人間と環境」	2
最近の講演会・研究会等	3
公開講演会 世界遺産からのメッセージー平泉・石見銀山の歴史力	3
伊達市噴火湾文化研究所との第 5 回学術交流連携講演会	4
プロジェクト研究ユニット「20 世紀ロシア・中国史再考研究」研究会	4
共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会	5
共同研究「20 世紀前半のサハリンの歴史的記憶」研究会	5
共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」出張報告会	6
客員教授紹介	7
センター関連出版物	7
活動風景	8
編集後記	8

## 巻頭言

## 東北アジア地域概念と日本人の世界観

 東北アジア研究センター長  
 岡 洋樹

本ニュースレター第 58 号の巻頭言で筆者は、地域とは課題群であると言った。では東北アジアにとっての課題群とは何であろうか。ここでは、そもそもグローバル化の波の中で、ロシア（とくにそのシベリア、極東）、モンゴル、中国、朝鮮半島、日本という五つの国から構成される東北アジアという、よりローカルな課題群設定を行うことの意味を考えたい。

明治以来、日本の最大の課題は、「西洋」にいかに向き合うのかにあったと言ってよい。西欧列強の進出に対して、いかにして日本を保全するのが問題だった。その方策が「アジア」との連帯であるにせよ、「脱亜」の道であるにせよ、根幹にあるのは自己の保全という目的である。明治期に創出された三つの歴史区分はそのような意識を反映しているように思われる。それは世界の歴史を「国史」「西洋史」「東洋史」に区分するものであった。ヨーロッパの普遍史的な歴史観に対して、まず「国史」を切り取ることによって自己の歴史を囲い込んで「安住の地」を作り出し、さらに「東洋」を分離した。ここでの東洋の位置は両義的である。一方では西洋文明の影としての「アジア」を意味し、他方では西洋に対する抵抗の「主体」としての期待が込められた。そしてこの部分には、前近代において日本が世界の「中心」と目した中国文明世界の名残がとどめられたのである。この世界史の三区分別は、世界の中心の存在を否定した。論理構造上、日本は中心たりえない。それは西洋からも東洋か

らも切断されているからである。西洋も同様に東洋や日本とは別個の小世界となる。東洋ではさらに「中華」の世界からその周縁部（モンゴル、トルコ、満洲など）が析出され、切り離された。大分類は果てしなく小分類へと分解し

ていく。このような世界史には、全体を総覧する「神」はいない。そして日本は、自分が東洋でも、西洋でもないものとなり、かといってスペシャルな自分への確信も持てないままに、内面化された葛藤は今に至るのだ。

東北アジアの現実には、この日本人に内面化された「世界」観を越えているのである。ロシアは「西洋」に、中国は「東洋」に区分されてきた。日本はそのどちらでもない。ところがロシア・中国・朝鮮半島・モンゴル・日本という顔ぶれは、この三つの区分に跨っており、日本人には遽には納得しがたいものとなる。いっしょになるはずのない世界が出来てしまったような、座りの悪さである。ようするに、東北アジアの課題群を捉えるためには、明治以来の日本人の内向きの世界観の克服が要求される。これが学としての東北アジア地域研究に求められる、最初の認識論上の課題である。

ではグローバリズムとの関わりではどうなのか。問題は、グローバルということが、普遍性をもった何者かなのか、



という点にある。明治の日本人も同じような印象を持ったのではないだろうか。ヨーロッパ（あるいは近代）が普遍的なのか、単なるヨーロッパのローカリティに過ぎないのか。当時の日本人は、ヨーロッパのローカリティを普遍であると無理矢理納得して、その波に合流することをもって自存の道と達観したのだろう。しかし「西洋」はついに我々のものではありえない。現今のグローバリズムは進行中の事態ではあっても、当面の現実では必ずしもない。かつてのヨーロッパ発の近代が、百年後の今日もなお「普遍」たりえないままに世界に拡散したように、グローバリズムも拡散しながらローカリティと競合していくだろう。グロー

バル化の象徴のように言われるツール言語としての英語の普及は、その「英語」で何を考えるのかまで決めることができない。「同文」であること自体は、ものの考え方や利害が同じであることを意味しないということを、「近代」において一番思い知ったのは日本人のはずである。興味深いのは、東北アジアのロシアも中国も、それがユーラシアであろうと再版中華世界であろうと、グローバル化の中で独自の地位を模索しているように見えることである。そこにグローバリズムの中で東北アジアを考える意味がある。東北アジアという課題群は、優れて我々にとっての歴史的課題なのである。

みやぎ県民大学開講

## 東北アジアの人間と環境

東北アジア研究センターは、昨年10月23日から毎週水曜日晚、みやぎ県民大学「東北アジアの人間と環境」を開催した。本センターでは、これまでも12月の公開講演会や東北大学リベラルアーツ・サロンなど、さまざまな機会をとらえて市民向けの講演やレクチャーを行ってきたが、みやぎ県民大学への出講ははじめてである。

東北大学片平キャンパス・さくらホールで開催された今回のみやぎ県民大学では、東北アジアと日本のつながり、近さをキーワードに、地域の社会・文化・自然・技術などのテーマとして、四人のセンター教員によるオムニバス講義が行われた。日本は、歴史上東北アジアと深い関わりを持ち続けてきた。前近代においては、主として書籍を通じた中国からの文化移入中心であったが、開国後は多くの日本人が直接中国やロシア、モンゴルを訪れるようになった。

第一回目の講師岡洋樹教授は、「歴史の中の東北アジアと日本」と題して、日本人が「満蒙」と呼び、肌で体験した東北アジア地域について、歴史的な経緯を清朝の時代に遡って論じた。

第二回目の佐藤源之教授は、「電波で見る東北アジアの自然と環境」と題して、衛星や航空機を利用したリモートセンシング技術や、地中レーダーによる地下計測技術などを紹介しつつ、東北アジアや日本でのその適用例を披露することで、技術を駆使することによって可視化される東北アジアのさまざまな課題を論じた。

第三回目の磯部彰教授は、「戦国大名の書籍蒐集と東北アジア」と題して、戦国末期の大名が江戸時代の外様大名として、明や朝鮮王朝の出版物を購入し、学問を重視したことを、伊達家の蔵書を中心に解説した。

第四回目の石渡明教授は、「東北アジア 大地のつながり」と題して、日本列島の地質と地震・火山、大陸移動説と日本海の形成、大陸の地質と日本とのつながりなど、地質からみた日本と東北アジアの「つながり」を取り上げた。そこには、地質によってつながる東北アジアの姿が見えるのである。

講義を聴講したの市民からも多くの質問がなされ、講師との間で熱心な応答が行われた。（岡 洋樹）



第一回目  
岡洋樹教授の講義



第二回目  
佐藤源之教授の講義



第三回目  
石渡明教授の講義



第四回目  
磯部彰教授の講義

## 最近の講演会・研究会等

## ① 公開講演会

世界遺産からのメッセージ  
—平泉・石見銀山の歴史力

平成 25 年 12 月 7 日（土）、仙台市戦災復興記念館において毎年恒例となっている公開講演会が開催された（主催：東北大学東北アジア研究センター、共催：東北アジア学術交流懇話会）。今年度の全体テーマは「世界遺産からのメッセージ—平泉・石見銀山の歴史力—」として、入間田宣夫氏（東北大学名誉教授、一関市博物館館長）に岩手県平泉を、仲野義文氏（石見銀山資料館館長）に島根県の石見銀山についてご講演をいただいた。

世界遺産に関するニュースは、いろいろなメディアでも取り上げられる社会的にも大きな関心事といえるだろう。日本で最近話題となったのは、富士山の世界遺産登録であり、研究関心だけでなく、観光や地域社会を含めた変化がみられている。

天気は良くなかったが本会には 125 名の来場者があり、仙台市・宮城県以外の他県からもご参加くださった。

入間田宣夫氏には、長年ご自身に取り組んでこられ、世界遺産登録にも尽力をされた岩手県平泉についてご講演をいただいた。入間田氏のご専攻は歴史学（日本中世史）で、東北アジア研究センターの創設から教授として活躍された。現在は、岩手県一関市博物館の館長を務められ、東北地方の中世史を幅広く研究されている。平泉の世界遺産登録では、「平泉の文化遺産」世界遺産登録推薦書作成委員会委員として、具体的な調査・研究に力を注いでこられた。今回は、①世界遺産登録への流れ、②平泉の文化遺産に関する評価、③平泉と周辺の歴史的意義、といった 3 点に論点を集約され、わかりやすく説明いただいた。

仲野義文氏からは、「世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」—普遍と固有の 2 つの価値から—」と題したテーマでお話をいただいた。仲野氏は、石見をはじめとする島根県の地域史研究を専門とされ、石見銀山資料館の館長として活躍されている。著書『銀山社会の解明』（清文堂出



公開講演会の様子

版、2009 年）では、石見銀山に関する歴史の流れや、それに関わる人々の社会状況について詳細をまとめられている。この世界遺産の登録にも専門家として尽力され、アジアで初めての鉱山遺跡「石見銀山」が世界遺産になった経緯をよくご存じの人物である。今回は、①石見銀山遺跡の概要、②銀山開発の歴史的意義、③銀生産の原風景と鉱山コミュニティ、など石見銀山に関する研究テーマをいくつかの大枠に絞ってご報告いただいた。

入間田、仲野両氏によって、世界遺産の歴史的意義や地域研究の重要性を改めて痛感させられた。今回は日本の文化遺産の事例を専門家に詳しく解説していただいた。関心を持つ人々にとって、これほどぜいたくなことはない。

終了後に出席者からアンケートをお寄せいただいた。そのなかでとくに多かったのは参加した動機として「世界遺産への関心」を挙げられた点である。研究者はもちろんのこと、社会的にも広くこのテーマに関心があることを示しているだろう。また、今回は文化遺産に絞って議論を深めたが、東北アジア研究センターの得意とする文理合同、学際的研究を視野に入れて、東北アジア地域における自然遺産や複合遺産を包括的に論じることも可能だろう。今後の開催テーマについても、「環日本海文化圏」や「東北アジアの諸言語相互の関係」、あるいは「微生物の世界と地域発展」など、多彩で興味深いリクエストもいただいた。どれだけご期待に沿えるか不明であるが、最新の東北アジア研究についてご紹介できる機会を大事にしたい。

ご多忙のなか貴重な成果をお伝えいただいた入間田、仲野両先生のおかげで盛会となった。両先生、およびお集まりくださった参加者の皆様方に末筆ながら厚く御礼を申し上げます。

（荒武 賢一朗）



入間田宣夫氏



仲野義文氏

## ② 伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター連携

### 第5回学術交流講演会



岡洋樹センター長



後藤章夫助教

晩秋を迎えた北海道で、2013年10月26日、伊達市噴火湾文化研究所の方々の多大な協力を得て、第5回の学術交流連携講演会を伊達市だて歴史の杜カルチャーセンターで開催した。

伊達市噴火湾文化研究所と本センターは、学術交流協定を結び、交代で相互訪問をし、講演会を開催している。今回は伊達市で開くことになり、岡洋樹センター長と後藤章夫助教が講師を務めた。

今回のテーマは、「地域を見つめる多様な視点―〈清代モンゴルの世界〉と〈有珠山噴火の活動予測〉」というもので、東北アジア地域の民族の生活について、また、伊達市からほど遠くない活火山の有珠山について、岡先生並びに後藤先生から研究紹介があった。

岡先生は、清の時代のモンゴル語史料を用いて、当時の

遊牧民の日常生活について紹介した。北海道の人々には、モンゴルはまだ遠い世界であったかもしれないが、モンゴルの文化や生活も熟知されている岡先生の説明に、聴者の方々は深くうなずいていた。

次いで講演に立った後藤先生は、2000年3月31日に噴火活動を開始した有珠山の状況把握が的確になされて、比較的早期に噴火活動が収束するという見通しを立てたところ、事態もその予測に応じたものになった、とその経緯を紹介した。有珠山の噴火活動については、伊達市民には身近な関心事であることから、多くの質問も出た。

東北アジアをめぐる文系と理系2分野の講演は、本センターならではの内容で、伊達市側のボランティア団体である「かけはしの会」の方々からもお褒めの言葉をいただいた。

(磯部 彰)

## ③ プロジェクト研究「20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット」2013年度第1回研究会

### 新疆における中ソ関係

「20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット」の2013年度第1回研究会が、12月26日に東北アジア研究センターにて開催された。4名の報告者が20世紀前半の新疆における中ソ関係について、興味深い報告を行った。中ソ関係というと、これまで焦点が当てられてきたのは中国東北（満洲）やモンゴルといった地域における相克や交流であったが、中ソ対立が激しくなるまでは、長大な国境を接する新疆でもまた、中ソ両国は濃密な関係を築いてきた。

第一報告者の上野稔弘准教授は「第二次大戦終結前後の新疆と中ソ関係」と題し、1930年代から50年代までの新疆をめぐる中ソ関係を概括した。特に、親ソ軍閥として著名な盛世才の陰に隠れて、あまり焦点が当てられてこなかった新疆省政府主席の呉忠信を中心に、中ソ関係が微妙なかじ取りを要求されていた45年前後を取り上げた。東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所の菅原純フェローは、「『新疆社会歴史調査』における宗教的寄進財（ワクフ）―土地の名称と分類をめぐる試論」と題し、イスラム教の特徴の一つである、信者の寄進の社会的な考察から、この地域におけるイスラ

ム教徒の生活の一端を描きだした。第三報告の東洋大学アジア文化研究所の安藤潤一郎客員研究員は、「西北『回民軍閥』と中国国家―国民革命



期以降の『寧馬』の事例」と題し、この地域において軍閥が形成されるに際し、地縁、血縁、そして宗教共同体がいかに深く絡み合っていたか、その相関性を考察した。最後の寺山恭輔教授の報告は、「ソ連の対新疆政策」と題し、スターリンが満洲事変以降、いかに新疆に力を入れるようになったのかについて国際政治の視点から描くと共に、盛世才が巧みにソ連から援助を取り付けていた様子を明らかにした。

新疆をめぐる中ソ関係の研究はまだ端緒についたばかりではあるが、近年、不安定さを増しているこの地域へのアプローチの一つとして、研究の進展が待たれる。

(麻田 雅文)

## 4 共同研究公開研究会

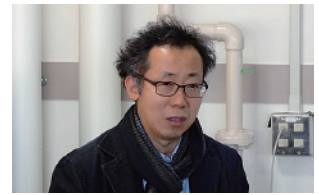
## 典籍文化遺産の研究

共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会では、2回に亘って公開研究会を開催した。第1回は、平成25年11月18日、センター客員教授である中国・北京大学中文系教授潘建国氏に「新発見のパリ所蔵明刊本『新刻全像批評西遊記』について」というテーマで、フランス国立図書館に残存していた『李卓吾先生批評西遊記』のテキスト紹介を行なっていただいた。かつて、民国時代に中国文学研究者も足を運んだパリの国立図書館だったが、潘先生は未紹介の明刊本『西遊記』1冊がありながら、今日まで研究対象となっていない状況を指摘しつつ、明刊本『西遊記』の版本の系統を考える上で、極めて重要な版本の残本である、と断じた上で、広島市にある明刊『李卓吾先生批評西遊記』との関係を、相互の画像を示しながら解説された。

潘先生の講演に続いて、磯部が、東北アジア研究センタープロジェクト研究ユニットで実施している「東アジア出版文化研究資料画像データベース」の公開が始まり、宋元版や明刊小説、絵画などの資料が使えるようになった現況報告をした。



第1回 潘建国氏



第2回 金暎根氏

第2回研究会は、年が明けた平成26年1月15日、部局間交流協定先の韓国・高麗大学校日本研究センターから客員研究支援者として受け入れた金暎根助教授に、「東日本大震災後日本経済と北東アジア経済協力の進路—TPP政策を中心に—」という題目で、日韓関係を基軸とした講演をいただいた。当日、北東アジア経済とTPPについては質疑を受けて話を進めたいとのことで、内容の中心は「3.11以後日本政治経済の変化と日本・北東アジアの進路」とし、韓国で収集され韓国語訳された震災関連の書籍の紹介と、韓国では文化財を含む日本の復興活動をいかに見ているか、という点を中心に話を進められた。震災復興は日本経済の動向も深く係わることから、質問もTPPをめぐる韓国の動向やその対応、サブプライムローンに端を発したリーマンショックと現代経済との関連など、広域に亘った。金暎根先生は、各種の質問に対して、TPP推進の是非を含め、市場開放へ向かう太平洋諸国の今日の状況について、経済指標を示しつつわかりやすく解説し、回答された。

(磯部 彰)

## 5 共同研究「20世紀前半のサハリンの歴史的記憶」2013年度第1回研究会

## 日本の北サハリン油田開発を振り返る

この研究会は京都大学地域研究統合情報センターが主催し、東北大学東北アジア研究センターなどが共催して、平成26年1月11日14～18時に仙台市戦災復興記念館で開催された。講演は平林憲次氏（元サハリン石油開発協力）の「戦前から現在までの北樺太の石油開発」、土屋範芳氏（東北大学環境科学研究科）の「石油会社の資料に見る北樺太石油開発史」、私の「地質学の学会誌に表れたサハリン研究史とその問題点」があり、続いて総合討論と研究打合せを行った。参加者は東北大10人（名誉教授2人と学生4人を含む）、北大3人、札幌大・奈良大各1人と平林氏の計16人であり、夜には市内で懇親会を行った。

この研究会の最初の打合せは前年7月20日に北海道大学スラブ研究センターで行われ、その研究代表者の兎内（とない）勇津流氏から、新たに発見された1920年前後のサハリン北部における油田調査の様子を示す写真帳などが示され、戦前の北樺太油田開発に深く関わった故牛島信義氏らが教員を務めた東北大学で第1回研究会を開催することになり、私が世話人になって実現したものである。今回の目玉は、本

学卒業後に技術者として北サハリンの海底油田開発に直接関わってきた平林氏の貴重な体験談を交えたスライド230枚以上の講演であった。土屋氏は石油会社が持っている戦前の樺太油田開発に関する資料の詳しいリストを示し、技術的な問題点などについて解説した。石渡は、樺太油田関係の論文数に1920年代と2000年代の2つのピークがあり、各々陸上油田（図1）と海底油田の開発に対応するとし、台湾、朝鮮、満州などと比較しながら樺太油田開発について論じた。歴史学と理工学による文理融合の有意義な研究会だった。

(石渡 明)

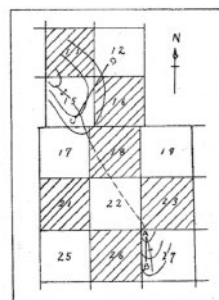


図1. 戦前の北樺太カタングリ油田鉱区図（牛島，1939；地質学雑誌，46，305）。斜線がソ連、白地が日本の鉱区。各約500m四方。戦前（陸上）も戦後（海底）も、北樺太の油田開発には日本が深く関与していた。

## 6 共同研究出張報告会

# 東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用

### 共同研究概要

本共同研究は、宮城県からの委託で2011・2012年度に実施された「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」の成果を受け、行政や教育機関との連携も視野に入れながら、地域社会の比較を通して民族誌情報の応用を行おうとするものである。ここで紹介する各出張報告会は、その一環として県内外の5ヵ所で実施されたものである。また、その一部は、宮城県地域文化遺産復興プロジェクト「宮城県被災民俗文化財調査成果公開事業」の補助を受ける形で行われた。(文中敬称略)

### 県内報告会



県内の報告会では事業の成果を調査地域に還元すると同時に、県内他地域の事例を比較材料とすることにより、情報交換と積極的な協働へ向けた議論を活性化する狙いがあった。

まず、2013年11月2日に、宮城県被災文化財調査成果公開事業「民俗芸能のチカラ～調査成果報告会 in 山元町～」が、第37回町民文化祭の一イベントとして山元町中央公民館において行われた(写真)。まず調査事業全体を紹介し[滝澤克彦(CNEAS)]、次に山元町の事例を中心に[高倉浩樹(CNEAS)・稲澤努(CNEAS)]、県内他地域の事例を比較[兼城糸絵(鹿児島大)・岡田浩樹(神戸大)]するかたちで報告が行われた。報告会を通じて、民俗文化財の今後について町民や教育委員会などとの連携の可能性が検討された。

県内第2弾の「出張成果報告会 in 気仙沼」は、11月3日に気仙沼市中央公民館で気仙沼市教育委員会との共催で行われた。ここでは、民俗文化財の保存会や担い手を主たる対象としていたこともあり、他地域での民俗文化財の現況を中心に紹介した。調査事業全体の報告[滝澤克彦]につづく事例の紹介[政岡伸洋(東北学院大)・山口未花子(北九州市立大)・岡田浩樹]では、民俗芸能や神社祭礼の再開状況と、それに伴う変化などについて報告された。また情報交換会[司会:小谷竜介(東北歴史博物館)]では、実際の保存会や担い手の方々からの率直な意見や、祭礼が変化してしまうことに対する複雑な気持ちなども吐露された。また、本学災害科学国際研究所の川島秀一がコメントータをつとめた。

12月16日には、七ヶ浜町歴史資料館において報告会が行われた。ここでは、調査に協力頂いた方々に対して、当

該地域における調査成果が公開された。調査事業紹介[川村清志(国立歴史民俗博物館)]に引き続き、2012年11月に撮影された「オジメサマ渡御」の映像が上映され、そこでは参加者から適宜解説や修正などを頂いた。また、アニメ聖地巡礼者の震災支援に関する報告[兼城糸絵]に対しては、サブカルチャーを利用した支援の可能性が指摘された。総合討論では、指定されていない無形民俗文化財に対する支援の難しさなどが述べられる一方、継続的調査やワークショップの必要性が確認された。

### 県外報告会

県外での報告会では、宮城県の民俗文化財の現状や調査体制について報告し、来るべき災害に対して本大震災を教訓とするための議論と情報交換が目的とされた。



静岡県立大学では10月21日に国際関係学部特別講義という形で報告を行った(写真)。高倉浩樹が被災地調査の概要・体制と意義について述べ、滝澤克彦が具体的事例を紹介したあと、松田香代子氏(静岡市文化財保護審議会委員・愛知大非常勤講師)からコメントを頂いた。講義後には、松田氏、静岡県立大学の湖中真哉氏、玉置泰明氏、松浦直毅氏、市文化財担当の多々良典秀氏を交えて座談会がもたれた。限界集落の民俗行事や紛争地域における緊急支援などとの関連性・類似性など多彩な観点から情報交換が行われた。また、学生の関わりを積極的に成果として発信していく取り組みの事例などが紹介された。

高知では、高知人文社会科学会の協賛を得て、こうちミュージアムネットワークおよび高知県立大学文化学部との共催という形で「被災した無形民俗文化財と地域復興における研究の役割—東日本大震災に伴う宮城県委託調査事業の報告—」が行われた(12月2日、高知県立大学)。この報告会では、宮城県の民俗文化財の具体的状況を紹介し[滝澤克彦・小谷竜介]、調査体制や本調査事業の意義について報告を行った[高倉浩樹]あと、梅野光興氏(高知県立歴史民俗資料館)にコメントを頂いた。南海トラフ地震による被害が予想されることから本調査事業に対しても高い関心がよせられ、総合討論[司会:飯高伸五(高知県立大)]でも活発な議論がなされた。特に、災害後の民俗文化財保全のために、研究者や学芸員、行政、学生、一般市民なども含めた事前のネットワーク形成が重要であることが改めて認識された。(滝澤 克彦・稲澤 努)



●教授  
Leo Lightart

レオ リヒタート先生はオランダ・デルフト工科大学をご卒業後、同大学で研究教育に携わり、1988年からレーダー講座教授、1994年に国際通信・レーダー研究センター (IRCTR) を創設し、16年間センター長でした。

リヒタート先生の研究専門はアンテナ電波伝搬工学、レーダーならびにリモートセンシングですが、衛星、移動通信無線でも多くの業績があり、650編の論文、2冊の著書の他多数の分担執筆をしています。またヨーロッパマイクロ波連合の創立メンバーで電波関係の主要な学会であるヨーロッパマイクロ波週間 (EuMW)、ヨーロッパレーダー会議 (EuRAD) の初代委員長を務めました。一方、ロシアなどでの研究交流を続けてこられており、モスクワ国立航空大学、トムスク制御電波科学国立大学、ルーマニア防衛大学などとの交流により、それぞれの名誉教授であり、ロシア交通アカデミーのアカデミー会員に選出されています。

私がリヒタート先生に初めてお会いしたのは1983年、大学院学生時代にデルフト工科大学でインターシップを行ったときでした。私は

情報科学の研究室で仕事をしていたのですが、本来の専門であるアンテナ工学を専攻されているリヒタート先生の研究室を訪問し、お話を伺いました。その後も学会などでお会いしてきましたが、1995年頃から双方の研究室で地中レーダーの研究が開始され、積極的な研究交流が始まりました。これまでデルフト工科大学から私の研究室に2名の学生を迎え、私の研究室からデルフト工科大学に1名のインターンシップ学生を派遣した他、2005年には佐藤がデルフト工科大学に客員教授として滞り、地雷検知に関する共同実験を行っています。また本センター助教だったティモフェイ・サバリエフも一時IRCTRの研究員を務めました。

現在リヒタート先生はデルフト工科大学の名誉教授であり、毎年3ヶ月程度インドネシアで講義を行うとともにインドネシア学術振興会LIPIの顧問です。電波研究にとどまらず、高齢化社会のための建築、高速道路と市街地を効率的に結ぶバスシステムなど、社会にゆとりをもたらすための学際的な研究を積極的に展開されています。(佐藤 源之)



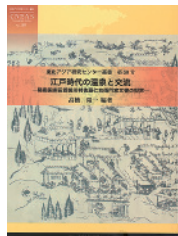
BOOKS 著書紹介

センター関連出版物

東北アジア研究センター叢書第50号

江戸時代の温泉と交流

一陸奥国柴田郡前川村  
佐藤仁右衛門家文書の世界一



高橋 陽一編著 2013年12月

2012年5月～8月にかけて、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークが中心となって、宮城県柴田郡川崎町(旧陸奥国柴田郡前川村)の佐藤仁右衛門家文書の調査が実施された。佐藤家は遅くとも江戸時代初頭より青根温泉の湯守(温泉管理人)を務め、温泉宿を運営している。調査の結果、同家に残る古文書の総点数は約2000点に上り、これまで解明されてこなかった江戸時代の通時的な温泉運営の実態や、温泉宿と周辺住民との公私にわたる交流を明らかにしうる貴重な史料が含まれていることが判明した。

本書では、調査成果の一端として、佐藤家文書の古文書の翻刻文を「温泉の歴史」「伊達家との交流」「日記・用留」「温泉の運営」「山林」「取引・交流」「証文」「家」「補遺」の項目に分けて掲載した。また、青根温泉の沿革や江戸時代の運営状況、佐藤家と仙南を中心とした周辺の地域住民・温泉との多層的な関係を解明した論説も掲載している。

温泉は、今や日本人にとって最もメジャーな旅先として定着しているが、その歴史、とりわけ前近代の具体的な状況についてはあまり知られていない。本書はその掘り起こし作業において、重要な位置を占めるものである。

東北アジア研究センター叢書第51号

『土族語詞彙』 蒙古文語索引



栗林 均編 2013年12月

「土族語」は中国青海省に居住する土族によって話されるモンゴル系の言語で、モンゴル語とも呼ばれる。本書は、ハ斯巴特尔(ハスパートル)等編『土族語词汇』(内蒙古人民出版社、1985年)に収録されている土族語(モンゴル語)の語彙約6千項目の中から、モンゴル語と共通の起源を有する単語を抽出して、対応するモンゴル語のローマ字転写形を見出し語として配列したものである。

見出し語のモンゴル文語形はローマ字転写表記でアルファベット順に配列し、それにモンゴル文字によるモンゴル文語形と簡単な日本語訳が付されている。見出し語に対応する土族語の形は音声記号表記により、それに原本に付されている漢語訳、原本の出現位置(記載頁)を示した。

数百年にわたって独自の発展を遂げてきたと考えられる土族語においてモンゴル系の単語がどのように保持されあるいは変化を蒙ったのか、土族語の歴史とモンゴル系言語の歴史を研究する資料とした。

本書は東北アジア研究センターのプロジェクト研究「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」の活動の成果として刊行された。

活動  
風景

## 様々な領域を超え共同プロジェクトを推進

東北アジア研究センター助教 塩谷 昌史

私はロシア経済史を専門に研究しているが、本学のロシア交流推進室の室員としても、日露の学术交流全般に取り組んでいる。

2013年8月31日から9月2日まで、シベリアのノヴォシビルスクで、国際セミナー「アジアの人口動態 - 歴史、現代、未来の仮説」に参加した。ロシア科学アカデミー・シベリア支部・歴史研究所（ノヴォシビルスク）と、シベリア支部・モンゴル学・仏教学・チベット学研究所（ウランウデ）、そして、Maulana Abul Kalam Azad アジア研究所（インド・カルカッタ）との共催であった。シベリアやインドの研究者だけでなく、トルコやカザフスタンの研究者も参加した。私は「19世紀ロシア貿易におけるアジア商人の役割」と題して報告を行った。最近では、ロシアの歴史家と言えども、歴史研究を行うだけでは十分でなく、国際プロジェクトを実施することが求められる。また、研究所の学術雑誌に外国人の論文投稿がなければ、水準の高い雑誌と認められないようである。このセミナーに参加することで、シベリアとインドの研究概要がよく理解できた。

10月11日に、モスクワ国立大学で「第2回日露人文社会フォーラム」を運営・開催した（写真1）。これは10月10日に同大学で行われた、「日露学長会議」や「日本の大学説明会」とほぼ同時開催となり、日露の学術面での友好関係を、ロシアの人々に訴える効果を発揮した。そもそも「日露人文社会フォーラム」は、日露の人文社会系研究者の情報交換を促し、将来的に共同研究や学生交換に寄与することを狙っている。日露間でこの種のフォーラムが行われる例は、2011年12月の第1回開催が初めてであり、幸いにも日露の学術関係者から評価され、第2回目の開催に繋がった。参加大学は、ロシア側からモスクワ大学、日本側から東北大学、東京大学、東京外国語大学、千葉大学であり、人類学、考古学、国際関係論、言語学、心理学、交通政策の6部門を設定した。この準備に当たり、6月と8月の2回にわたりモスクワ大学を訪れ、企画の調整を行った。第3回目の人文社会フォーラムは2015年春に千葉大学で行われる予定である。

東北アジア研究センターは、地域研究コンソーシアム(JCAS)の幹事校であり、この4年程、上野先生と私でJCASの運営委員会として、コンソーシアムの運営に協力している。コンソーシアムは年に一度、年次集会を行うと

同時に、シンポジウムを開催する。6月からシンポジウムの企画運営を愛知大学関係者で行ってきた。愛知大学は中国研究に優れた大学だが、最近、日中関係が悪化しており、打開策が見つからないのが現状のようである。他地域の視点から日中関係を考えたいという愛知大学の提案に沿って2013年11月9日に愛知大学でシンポジウム「日中関係の質的変容をどう理解するか—他地域の視点から捉え直す—」を開催した。フィリピン、タイ、ミャンマー、シンガポール、ロシアの研究者が集い、各地域と中国との関係に触れてもらった。シンポジウムは予想以上の盛り上がりを見せた。現在、このシンポジウムの報告書を準備している。

私はロシアの工業化を再検討するために、ロシア更紗を取り上げ、その生産～流通～消費を一つの循環として研究してきた。その中で分かったのは、ロシア更紗の源流を二つに大別すると、①中央アジア(ブハラ)と②ヨーロッパ(英国とフランス)の起源が存在することである(写真2)。更紗のデザインに着目すると、中央アジア起原のデザインが淡い赤である一方、ヨーロッパ起原はトルコ赤のペイズリーになる。この点について、『ロシア綿業発展の契機—ロシア更紗とアジア商人—』(知泉書館)という本で触れた。中央アジア起原のデザインは詳しく調べてきたが、フランス(ミュルーズ)の事情には疎かった。そのため、12月にミュルーズを訪ね、染織博物館の学芸員に話を伺うと同時に、現地の文書館を訪れ、フランスとロシアの関係を調べた。すると、ミュルーズにロシア語の文書が存在することが分かり驚いた。通常、ヨーロッパの更紗と言えば、英国更紗に焦点が当てられるが、ミュルーズのペイズリー更紗も重要である。



写真1 第2回日露人文社会フォーラムの開会式



写真2 フランス(左)とロシア(右)のペイズリー更紗

編  
集  
後  
記

昨年9月に震災の補修と改修を終えた川北合同研究棟へ復帰した後は、空っぽの建物で本棚を組み立て、預けてあった机や椅子、機器類を据え付け、数百箱のダンボール箱の資料を並べ直す作業が年明けまで続きました。当初は広々と感じていた机の上も、気が付けばいつの間にか書類と資料の山と化し、探し物に難渋する毎日です。そんな折にNHK「プロフェッショナル仕事の流儀」でアイリスオーヤマでは「整理整頓」が社風として引き継がれ徹底されていることを知りました。「机のあり様はその人の頭の中だ」という言葉が心に染みました。(栗林 均)

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第60号 2014年3月24日発行

発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会  
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番地 東北大学東北アジア研究センター  
PHONE 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

